

# 「豆鹿説話」をとおして見たインドネシア民話の多文化性

## ——説話モチーフ分布と文化交流史を対照させる試み——

百瀬侑子 (大阪経済法科大学  
アジア太平洋研究センター)

キーワード：インドネシア民話、「豆鹿説話（カンチル説話）」、多文化性、説話モチーフ

### はじめに

世界各地の民話・伝説など説話（民間において口頭伝承されてきた話）を概観してみると、類似したモチーフ<sup>(1)</sup>が広く分布していることがわかる。人類が言語を獲得し、地理的移動（移住・交易・婚姻・戦争・旅など）をとおして、相互交流や文化接触を繰り返すことによって、長い間に説話自体が地域間を移動したことがその一因である。口承説話が記録され、さらに説話文学化<sup>(2)</sup>されると、より一層説話の移動・伝播は加速化されるとともに、遠隔地へと移動する。その典型例はインドの『パンチャタントラ (Pancatantra)』<sup>(3)</sup>に見ることができる。もちろん類似モチーフは無関係に別々の地域で偶然に生まれることもあるが、「人の移動と文献とが民間説話の移動の主力」<sup>(4)</sup>である。

本稿では、現インドネシアおよびマレーシア

<sup>(5)</sup>に分布する「豆鹿（カンチル *kancil* あるいはプランドウック *pelanduk* と呼ばれている）を主人公とする動物寓話」（以下「豆鹿説話」と呼ぶ）をテーマに据えて、説話モチーフの分布と文化交流史を対照させながら、「豆鹿説話」の中には様々な文化接触と文化交流によって育まれた「多文化性」が具現されていることを明らかにする。また「豆鹿説話」の中の「豆鹿と鱈」の話を事例に取りあげ、モチーフ分析をとおして、モチーフの伝播過程について筆者の仮説を示す。説話モチーフの分布および伝播と文化交流史<sup>(6)</sup>を対照させるひとつの試みである。

全体の構成は次のとおりである。「1」では「豆鹿説話」とはどのようなものか説話の具体例と特徴を示す。また「豆鹿説話」の発掘・記録・文学化・研究の歴史を辿り、本説話が今日まで継承されてきた経緯について述べる。「2」では、インドネシアを中心とする東南アジア島嶼部が多文化性を獲得するようになった歴史的経緯について、外来文化受容の歴史および域内文化交流史を概観する。「3」では、まず「豆鹿説話」モチーフを分析することによって、「豆鹿説話」

(1) モチーフとは「物語構成の最小の単位もしくは要素」である。関敬吾『日本昔話比較研究序説』日本放送出版会、1977年、205頁

(2) 説話文学とは「口頭で伝承された説話が文字によって文学化されたもの」である。田中於菟弥『説話文学』『世界百科事典(第5巻)』平凡社、1990年、612頁

(3) 原本は亡失したが数種類の伝本があり、そのひとつが6世紀に中世ヘルシャ語に訳された後、アラビア語（アラビア語では『カリラとディムナ』と改題）、ヘブライ語、シリア語など各国語に翻訳された。東南アジアへの伝本は3種類ある。南インドの伝本の系統をひく最も古いもの、アラビア語からマレー語に翻訳されたもの、タミル語訳（1835年）のものである。南インド伝本のうちジャワ語への翻訳の最も古いのは「タントリ・カマンダカ」（14世紀のテキストが知られている）である。詳しくは、岩本裕『インドの説話』紀伊国屋書店、1994年、13-15頁

(4) 伊藤清司『昔話・伝説の系譜—東アジアの比較説話学』第一書房、1991年、x頁

(5) インドネシアおよびマレーシアは広義の「マレー世界」である。詳しくは、西尾寛治「マレー（ムラユ）世界論の現状と背景」『歴史と地理 世界史の研究』203号、2005年5月

(6) 本稿では、文化交流とは政治経済社会など人々が行う諸々の活動に関する交流を指す。

には外来モチーフ摂取に起因する「広域性」、外来文化に消されないあるいは外来文化の現地化による「在地性」が混在していることを示す。続いて「豆鹿説話」のうち「豆鹿と鰐」の話为例に、「2」での考察結果を援用しながら、モチーフの伝播と多文化性について筆者の仮説を述べる。終わりに、全体のまとめを行い、現代のインドネシア人にとって「豆鹿説話」がどのような役割と意味を持っているかという問題に触れたい。

## 1. 「豆鹿説話」の特徴と系譜

### 1-1 「豆鹿説話」の特徴と分布

説話の主人公「豆鹿」は動物学上の分類では「偶蹄目反芻亜目マメジカ科」に属する「ジャワマメジカ」であり、東南アジアの熱帯雨林に住む<sup>(7)</sup>。ウサギ大の弱小動物で、森では大型動物から常に命を狙われている。「豆鹿説話」はかつては口承民話であったが、現在では主に子ども用民話本としてインドネシアやマレーシアで普及している。インドネシアの子ども百科事典には「カンチル（豆鹿）は数々の物語のなかで非常に賢い動物として描かれており、森の王者の虎を騙し、川の王者鰐をも策略によって負かす。悪戯者だから敵も多い」と解説されている<sup>(8)</sup>。また「賢く策略的な人」の代名詞にもなっている<sup>(9)</sup>。いわゆるトリックスター<sup>(10)</sup>でもある。

以下に「豆鹿説話」から有名な2つのエピソードを抜粋し、要約を示す。

#### 例1 「豆鹿と虎」<sup>(11)</sup>

賢い豆鹿が木陰で居眠りをしていると、傍らで水牛が糞をした。そこへ豆鹿を狙う虎が現れ

る。「何してるんだ」と虎が問う。豆鹿はどう答えたらよいか思案する。「いい匂いがするでしょ」「それはなんだ」「ソロモン様がめしあがるお粥です。見張りをするように命じられたのです」「うまそうだな」と、虎は食べたがる。豆鹿は自分がここから遠ざかったら食べてもいいと言い残し、逃げる。虎は粥（実は牛糞）をなめて初めて騙されたことを知る。話は続く。とぐろを巻いた蛇をソロモンの腰ベルトだと偽り、豆鹿は虎の好奇心を煽る。偽ベルトを締めた虎は蛇に巻きつかれて死にそうになる。さらに虎を騙す。蜂の巣をソロモンの銅鑼だと偽り、叩きたくるようにしむけ、銅鑼を叩いた虎は蜂に刺されてさんざんな結果となる。（中略）こうして豆鹿は凶暴な虎を知力で度々負かすのである。

#### 例2 「豆鹿とヤドカリ」<sup>(12)</sup>

駿足に自信を持つ豆鹿は海辺でヤドカリに競走をもちかける。ヤドカリは仲間を集めて作戦を練る。競走の当日、ヤドカリは一致団結して浅瀬に身を隠し、豆鹿が走る前方から順番に姿を現わして先行していることを知らせる。遂に豆鹿は力尽きて、敗北を認める。

「豆鹿説話」のエピソードは、弱小動物が我が命を護るために、知力で森の強者（虎や鰐）を破るという話が基本となっている。だが、自分より弱者<sup>(13)</sup>には敗れる。根底に奢れる者への戒めと弱者への共感が存在する。説話のモチーフに注目すると、インド説話からの借用モチーフ（上記例2）、東南アジア大陸部との類似モチーフ（上記例1）が散見され、「預言者ソロモン」の名が登場することから、イスラームの影響も見られる（詳しくは「3」）。豆鹿は独

(7) 松林尚志「マメジカの生態と行動」安田雅俊他著『熱帯雨林の自然史』東海大学出版会、2008年、128頁

(8) *Ensiklopedi Anak Nasional 6*, PT. Cipta Adi Pustaka, 1991, p.56

(9) Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, *Kamus Besar Bahasa Indonesia ed-2*, Balai Pustaka, 1997, p.439

(10) インドネシア説話におけるトリックスターについては次の書が詳しい。Roland B. Dixon, *The Mythology of All Races vol. IX: Oceanic*, Cooper Square Publishers, 1964, pp.203-205

(11) Siento Soemiaty Soetijpto, *Kancil dan Harimau*, PT. Gramedia, 刊行年記載なし

(12) R.O.Winstedt, Some Mouse-deer Tales, *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society*, No.45, 1906  
（マラッカに住むマレー人が少年時代にジャワ人移住者から聞いた話を Winstedt が採録）

(13) 伝承地域によってヤドカリはカタツムリ、オタマジャクシなどに置き換えられる。

特のキャラクターとして、インドネシア・マレー地域の人々に愛されている。一方、話のモチーフは多文化が混交したハイブリッド型で、外来モチーフが多く借用されている（詳しくは「3」）。主人公が豆鹿ではなく、他の動物（猿、亀、兎、鼠など）に置き換えられた類似説話（以下「豆鹿系説話」と呼ぶ）が東南アジア大陸部、東部インドネシア、フィリピンなどに広く分布している。実際これら類話の存在する地域間では太古より頻繁に人々の交流や接触が行われてきたのである。事実を確認するために、「2」では当該地域間の交流史について探る。文化接触や交流によって説話モチーフが拡散したと考えられるからである。

## 1-2 「豆鹿説話」の採録および「豆鹿説話文学」の研究

「豆鹿説話」や「豆鹿説話文学」を今日享受できるのは、皮肉にも植民地時代における宗主国の研究者の業績に負うところが大きい。東南アジアの植民地化とともに、言語学・文献学・東洋学に関心を寄せるヨーロッパ人行政官や研究者によって口承民話の記録や古典文学写本の収集と研究が行われたからである。「豆鹿説話」や豆鹿説話文学もまたその対象となる。民間に流布していた口承の「豆鹿説話」がイギリス領のマラヤやオランダ領東インド（インドネシア）でヨーロッパ人研究者によって、直接語り手から採録され、研究されるようになるのは19世

紀初頭から20世紀初頭である<sup>(14)</sup>。また同時期にヨーロッパ人研究者によって古典ジャワ文学や古典マレー文学の研究が活発化し、豆鹿説話文学の写本収集・研究・校訂・出版も行われた。マレー語による豆鹿説話文学のなかで最も有名な *Hikayat Pelanduk Jenaka*（和訳すると「滑稽な豆鹿物語」）の写本のうち、現存する最古の写本は17世紀中頃のもので<sup>(15)</sup>、その後も数種類の写本が作成されている<sup>(16)</sup>。これらはイスラームの受容後、マレー語をアラビア文字で表記した *Jawi*<sup>(17)</sup> 写本である。この物語では、豆鹿が森の王として知恵と策略を以って不動の地位を築く過程が数々のエピソードによって描かれている。

一方ジャワ語の豆鹿説話文学に目を向けると、現存する最古の作品は1822年頃宮廷詩人 Amongsastra によって編纂され、1878年にオランダ人研究者 Palmer によって出版された韻文の *Serat Kantjil*（『豆鹿物語』）<sup>(18)</sup> である。内容は「豆鹿と虎」「豆鹿と鰐」「豆鹿とカタツムリの競走」「豆鹿井戸に落ちる」などのモチーフから構成されている<sup>(19)</sup>。だが遡れば、「豆鹿説話」のモチーフに多大な影響を与えた『パンチャタントラ』が14世紀に古ジャワ語で『タントリ物語』<sup>(20)</sup> として翻案されているので、ジャワにおける豆鹿説話文学の起源は14世紀頃まで遡るのかもしれない。そのうえ、*Hikayat Pelanduk Jenaka* の現存最古の写

(14) マレー半島での採集記録は、Walter Skeat, *Fables and Folk Tales from an Eastern Forest*, Cambridge University Press, 1901、*Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* における Laidlaw (1906) および Winstedt (1906) を参照。インドネシア地域では19世紀初頭から20世紀にオランダ人研究者などにより各地で口承民話の採録が行われた。そのうち「豆鹿説話」「豆鹿系説話」の採録者（括弧内は採録地）は、Ophysen（ランブンおよびマンダイリン）、Brandes（ジャワ）、Kern（スンダ）、Adriani（タナ・トラジャ）、Jonker（ロティ島）などが挙げられる。詳しくは、ヤン・ドウ・フリース『インドネシアの民話』（斎藤正雄訳）法政大学出版局、1984年、776頁

(15) I. Proudfoot, A "Chinese" Mousedeer Goes to Paris, *Archipel*, vol.61, 2001, pp.69-97

(16) I. Proudfoot, Variation in a Malay Folk-Tale Tradition, *Review of Indonesian and Malaysian Affairs*, vol.18 summer, 1984, pp.87-102

(17) Jawi の最も古い例は14世紀の Trengganu 石碑 (Richard Winstedt, *A History of Classical Malay Literature*, Oxford University Press, 1969, p.2) にある。マレー語はインド文字で表記された時代もあり、7世紀後半のブラフミー文字（インド文字）による古代マレー語碑文がパレンバン付近（シュリーヴィジャヤ国の都）で発見されている（青山亨「インド再考 東南アジアとインド文明との対話」『総合文化研究』10号、2007年、131頁）。

(18) Asdi Dipodjojo, *Sang Kantjil: Tokoh Tjerita Binatang Indonesia*, Gunung Agung, 1966, p.24

(19) 前掲 Dipodjojo 1966, pp.25-26

(20) ジャワ語による最古のタントリ物語は『タントリ・カマンダカ (*Tantri Kamandaka*)』（14世紀）である。

本は東ジャワで作成されたようで<sup>(21)</sup>、このマレー語による豆鹿説話文学はジャワ製の可能性が高い。なお、*Serat Kantjil*以降、オランダ植民地時代の20世紀前半に数々の豆鹿説話文学がジャワで出版されている<sup>(22)</sup>。

一方イギリス植民地のマレー半島においても、イギリス人研究者によって、19世紀末以降、豆鹿説話文学写本の研究・校訂・出版が行われている<sup>(23)</sup>。このように豆鹿説話文学研究および保存は植民地時代の研究成果に大きく依存している。マレー語あるいはジャワ語による豆鹿説話文学の内容を見ると<sup>(24)</sup>、その特徴はテーマや目的に合わせて、素材としての口承モチーフを効果的に取り入れながら、作者の思想を反映させるための創作が付加されているという点である。創作部分には時代風刺、社会批判、イスラーム思想などが述べられ、作品のテーマが示されている。文学化によって「豆鹿説話」は多様化し、今日まで継承することができたのである。

## 2. 「豆鹿説話」分布地域における文化接触・交流の歴史

「豆鹿説話」が分布する現在のインドネシアとマレーシアは東南アジア島嶼部に位置する多民族・多文化から成る地域である。かつては文化や言語を共有する世界であった。「2」では歴史学などの研究成果に依拠し、この地域の外来文化受容と東南アジア域内交流の略史を確認する。「豆鹿説話」の多文化性を明らかにするた

めの準備作業でもある。「豆鹿説話」の持つ多文化性もまた外来文化の受容および東南アジア域内の相互交流と密接に関連しているからである。

東南アジアは東西両世界を結ぶ位置にあり、「古代から現在まで、外の文明との関係を通じて、また内部のネットワークを通じてその歴史を形成してきた」<sup>(25)</sup>という特性を持つ。遡れば、氷河期が終わり東南アジアが大陸部と島嶼部に切り離されて、現在のような地理的環境が成立したのは約1万年前である<sup>(26)</sup>。現在の島嶼部の主要な居住者であるモンゴロイドが大陸部から島嶼部へと移動を始めたのは5000年前頃で、その後幾重もの移動が行われた<sup>(27)</sup>。島嶼部における多民族性と多文化性の主要因は民族の移動と後述する交易ネットワークによる地域間の接触だと言えるだろう。

説話の伝播において言語は重要な要素である。東南アジア島嶼部の言語は大部分がオーストロネシア語族（南島語）に分類される。下位区分のインドネシア語派西インドネシア語群には「ボルネオ、ジャワ、スマトラ、マラヤなどの主要言語が大概これに含まれる」<sup>(28)</sup>。この語群はまさに「豆鹿説話」を共有する地域と合致するのである。オーストロネシア語の故地は大陸部だと推定され<sup>(29)</sup>、かつてチャンパ王国（ベトナム中南部）を建設したチャム族の言語がオーストロネシア語族であるという事実とその痕跡を確認できる。このチャム族にも「豆鹿説話」が存在するのである<sup>(30)</sup>。

紀元前400年頃、ドンソン文化が現在のベト

(21) 前掲 Proudfoot 2001, p.96

(22) 前掲 Dipodjojo 1966, pp.24-40

(23) 前掲 Dipodjojo 1966, pp.41-48 および前掲 Proudfoot 1984, p.89

(24) 前掲 Dipodjojo 1966, pp.24-48

(25) 桜井由躬雄「南海交易ネットワークの成立」桜井由躬雄編『岩波講座 東南アジア史 1』岩波書店、2001年、114頁

(26) 大林太良他「東南アジアの先史文化」大林太良編『東南アジアの民族と歴史』山川出版社、1984年、91頁 なお1万年前には人類はすでに音声言語を獲得していたらしい。

(27) 深見純生「古代の栄光」池端雪浦編『東南アジア史 II 島嶼部』山川出版社、1999年、19頁

(28) 高谷好一他「東南アジアの自然・人種・言語」大林太良編『東南アジアの民族と歴史』山川出版社、1984年、62頁

(29) 同上 高谷他、71頁 なお、オーストロネシア語族の故地は台湾あるいは中国南部という説もある（後藤明『南島の神話』中央公論新社、2002年、50-54頁）。

(30) 齋藤正雄「チャムの動物寓話」『民話と文学』第9号、1981年

ナム北部に成立する。ドンソン文化の青銅器は中国南西部、マレー半島、スマトラ南部、ジャワ、バリ、ヌサトゥンガラ、マルク、カリマンタン（ボルネオ）などで発見されており<sup>(31)</sup>、紀元前から東南アジア域内において広域的な交易が行われていたことがわかる。ドンソン文化の分布する地域は「豆鹿説話」や「豆鹿系説話」が分布する地域と重なる。西暦1世紀前後には金・香料・真珠などを求めてインド人が島嶼部へ進出する。またインド起源の回転紋土器（BC150-AD200年頃）がマレー半島、バリ島北部やジャワ島でも発見されており、広範囲にインド文化の到来が実証されている<sup>(32)</sup>。西暦1世紀頃に扶南（現在のカンボジア・ベトナム南部）<sup>(33)</sup>が、2世紀末に林邑<sup>(34)</sup>が東西交易（地中海から中国までの海のシルクロード）の中継地として栄えた。インド文化が積極的・広域的に受容されるのは4～5世紀であり、インド系文字の碑文や仏寺・神殿の遺構が島嶼部でも発見されている<sup>(35)</sup>。

7世紀に成立したシュリーヴィジャヤは東西交易の主要ルートであるマラッカ海峡の海上交通を支配する大交易国となり<sup>(36)</sup>、マレー語流通地域が拡大する。そのシュリーヴィジャヤも7世紀後半にジャワのシャイレンドラ家に支

配される<sup>(37)</sup>。カンボジアやチャンパの刻文やベトナムの漢籍から8世紀にシャイレンドラ家だと推定されるジャワの勢力が東南アジア大陸部にまで進出したことがわかる<sup>(38)</sup>。このように、大陸部と島嶼部の接触や交流は政治的支配関係によっても影響を受けた。なお8世紀末にジャワから帰還した水真臘の王子が国内統一を行い、アンコール朝の初代王になったという興味深い出来事がある<sup>(39)</sup>。

10世紀初頭に中部ジャワの古マタラム王国が東ジャワへ遷都し（クディリ王朝）、地の利を生かした交易活動によって<sup>(40)</sup>、物流の中心地としてのジャワの役割が重くなる<sup>(41)</sup>。続くシンゴサリ王国、マジヤパヒト王国は島外への勢力拡大を活発に行い<sup>(42)</sup>、14世紀中葉にはマレー半島と現在のインドネシア地域のほぼ全域にマジヤパヒト王国の影響力が及ぶ。その進出地域は文化的にもジャワと密接な関係ができる<sup>(43)</sup>。ジャワの宮廷文化は、「雅やかな宮廷文化にあこがれた保護国の人々によって受容され、あるいは模倣されていった」<sup>(44)</sup>という。マジヤパヒト国の最盛期（14世紀後半）に編纂された年代記『デーシャウルナナ』（『ナーガラクルターガマ』）には、軍事進出により保護下に置いた地域のみならず、親交国に関する記述も

(31) 坂井隆「群島部の考古学」『東南アジアの考古学』同成社、1998年、190-191頁

(32) 深見純生「マラッカ海峡交易世界の変遷」『岩波講座 東南アジア史 1』岩波書店、2001年、258頁

(33) 辛島昇「古代・中世東南アジアにおける文化発展とインド洋ネットワーク」『岩波講座 東南アジア史 1』岩波書店、2001年、311頁

(34) 中国側の呼称は「林邑」でその後「環王」「占城」と変る。4世紀末頃からは「チャンパ」と名乗る（歴史研究会編『世界史史料 3』岩波書店、2009年、374頁）。

(35) 前掲 深見 2001、262頁

(36) 前掲 歴史研究会編 2009、366頁

(37) マレー半島中部のナコンシータマラートで発見されたりゴール碑文（775年）から判明した（前掲 深見 2001、274頁）。

(38) 前掲 深見 2001、274頁

(39) 石澤良昭「アンコール＝クメール時代」石澤良昭編『岩波講座 東南アジア史 2』岩波書店、2001、55頁

(40) ジャワやバリで生産された米を代価にして、マルクのクローブ、バンダ諸島のナツメグ、ティモール島の白檀などの商品を購入して、世界市場へ中継貿易方法である（石澤良昭「総説」『岩波講座 東南アジア史 2』岩波書店、2001、9頁）。

(41) 同上、9頁

(42) クルタナガラ王はスマトラ遠征（1270年）によって属国（マラユ王国）を成立させ、バリ島遠征（1284年）の際はバリの支配者を捕虜として連れ帰っている（青山亨「シンガサリ＝マジヤパヒト王国」石澤良昭編『岩波講座 東南アジア史 2』岩波書店、2001年、205-206頁）。

(43) N.J. クロム著『インドネシア古代史』（有吉巖編訳）天理教道友社、1985年、338頁

(44) 前掲 青山 2001、221頁

ある。親交国とはカンボジア、ビルマ、タイ、ベトナムなどに該当する地域の国々である<sup>(45)</sup>。この地域は「豆鹿系説話」の説話モチーフの伝播が確認される地域なのである（「3」）。また、ジャワの『ラーマ物語』<sup>(46)</sup>はネットワークを通じて港市マラッカをはじめジャワ島以外でも、15世紀中頃に広く人気を得たという<sup>(47)</sup>。政治勢力の伸張は文化的にも大きな影響力を及ぼすことがわかるのである。

東南アジア現地人のイスラームへの改宗が記録に現れるのは13世紀であり、13世紀末にはイスラームを国教とし、交易を国家経済の基盤とするサムドラ・パサイが成立する。15世紀以降、マラッカ王国、アチェ王国、ドゥマク王国、マタラム王国など次々とイスラームを国家原理とする国々が興る。隆盛を極めたマジャパヒト王国も16世紀初頭にジャワ初のイスラーム国であるドゥマク国に滅ぼされる。インド洋交易はイスラーム商人の主導となる<sup>(48)</sup>。マラッカは島嶼部イスラームの根拠地となり、15世紀を通じて東南アジアを代表する交易港となる<sup>(49)</sup>。マラッカで共通語として用いられていたマレー語とイスラームがセットとして島嶼部各地に広まり<sup>(50)</sup>、広域的に文化が共有される（マレー文化圏）。マラッカを核とする交易ネットワークはビルマ、タイ、スマトラ、ジャワ、東部インドネシア、カリマンタン、ルソン、チ

ャンパなど東南アジア域内をより一層緊密にリンクさせた<sup>(51)</sup>。

しかしマラッカ極集中の交易網は1511年にマラッカ王国がポルトガルの支配を受けてから、新たに台頭してきたアチェ<sup>(52)</sup>、バンテン、マカッサルなどの港市国を加えた多極的取引網へと変化する<sup>(53)</sup>。この時代、マラッカのイスラーム知識人はポルトガルの支配から逃れて各地へ拡散した<sup>(54)</sup>。イスラーム化は文学や芸術などの分野にも影響を及ぼす。14世紀にはマレー語がアラビア文字で表記されはじめ、15世紀以降、マレー地域の宮廷周辺で語られていた王統記などが記録され写本として保存される<sup>(55)</sup>。「豆鹿説話」を素材とした説話文学がアラビア文字で写本化されたのもこの頃である（「1」）。

15世紀末に始るヨーロッパ各国のアジア進出によって、これまでの取引秩序は破壊され<sup>(56)</sup>、東南アジアに新たな権力者が出現する。インドネシアでは各地でオランダとの対立・抗争が起こり、結果として民族移動を招いた<sup>(57)</sup>。民族移動は文化の移動でもある。島嶼部においては、最終的にオランダが1910年代前半に（オランダ領東インド）、イギリスが19世紀後半に（イギリス領マラヤ、イギリス領ボルネオ）支配地域を確定する<sup>(58)</sup>。植民地支配によってマレー世界は分断されたが、「豆鹿説話」は今日

(45) 前掲 青山 2001、220 頁

(46) 詳しくは、青山亨「インドネシアにおけるラーマ物語の受容と伝承」『ラーマヤナの宇宙』春秋社、1998 年

(47) 前掲 Winstedt 1969、p.38

(48) 弘末雅士「東南アジアにおけるイスラームの展開」榊山紘一他編『岩波講座 世界歴史 6』岩波書店、1999 年、184 頁

(49) 前掲 坂井 1998、236 頁 なおマラッカの居住者には大勢の外国生まれか現地生まれのジャワ人がいたという（前掲 Winstedt 1969、p.38）。

(50) 前掲 坂井 1998、236 頁

(51) 前掲 弘末 1999、186-187 頁

(52) アチェは 1613 年にマレー半島のケダー（クダ）、ペラ、パハンを服属させた（前掲『東南アジア史Ⅱ』106 頁）。

(53) 鈴木恒之「オランダ東インド会社の覇権」『岩波講座 東南アジア史 3』岩波書店、2001 年、95 頁

(54) 前掲 青山 2007、133 頁

(55) 弘末雅士『東南アジアの建国神話』山川出版社、2003 年、9 頁

(56) 石井米雄「総説」『岩波講座 東南アジア史 3』岩波書店、2001 年、13 頁

(57) たとえば 1669 年のオランダ・マカッサル戦争によるマカッサル王国の解体により、多数のマカッサル人が東部ジャワへ移住した（前掲『東南アジア史Ⅱ』125 頁）。またジャンビヤやバレンバンはブギス人難民の移住センター化した（古川久雄『インドネシアの低湿地』勁草書房、1992 年、197 頁）。

(58) 今日のマレーシアとインドネシアの二国家へと導く出発点となる（前掲『東南アジア史Ⅱ』181 頁）。

まで残り、インドネシアやマレーシアで児童文学や子ども向け民話として享受されている。

### 3. 「豆鹿説話」モチーフの分析

南アジアや東南アジアには、モチーフ構成の似た動物寓話が広く分布している。古来インドの民間に流布していた民話やそれらを素材として書記・編纂された仏教説話集『ジャータカ (Jataka= 釈迦の前世譚)』<sup>(59)</sup> や教訓的寓話集『パンチャタントラ』の影響を強く受けているからである<sup>(60)</sup>。「2」で述べたように、インドの東南アジア進出は紀元前後に遡り、精神・物質両面でインド文化が東南アジアに及ぼした影響は大きい。またインド説話は早期に文字化・翻訳されたため、地域を越えて伝播した。その後イスラームの伝来により、説話にイスラーム色が添加された<sup>(61)</sup>。「豆鹿説話」においても然りである(後述)。「豆鹿説話」の多様性は主に外来文化の受容過程における説話モチーフの借用に起因するが、精査すると、外来文化であるインドやイスラーム説話の模倣にとどまらず、東南アジア域内文化の影響を受けつつ、マレー世界独自の「在地化された」動物寓話が創出されているのである。

#### 3-1 モチーフの広域性と在地性

以下では「豆鹿説話」における代表的な借用モチーフを例示することにより、その広域性およびモチーフの現地化(あるいは在地性)について検証する。

##### ①『ジャータカ』よりの借用例

『ジャータカ』(16話)<sup>(62)</sup>には「罨にかかった小鹿はもがかず、全身を硬直させて死んだふりをした。鹿が死んだと思った獵師が罨を解くや否や鹿は逃げた」という話がある。「死んだふりをして助かる」というモチーフは各地の「豆鹿説話」「豆鹿系説話」に類話がある。たとえば、マラッカで採録された話は「豆鹿は農民の罨にはまる。鳥の協力で悪臭の鳥もちを全身に塗って死んだふりをする。豆鹿は農民に捨てられて助かる」という内容である<sup>(63)</sup>。ランボン(南スマトラ)には「罨に落ちた豆鹿が茅の穂を全身につけて死んだふりをして解き放たれる」という話がある<sup>(64)</sup>。同様のモチーフはマレー半島、西ボルネオ(現在の西カリマンタン州)、スマトラ、ジャワ、スラウェシ、ハルマヘラなど島嶼部に、また主人公は兎など別の動物に置き換えられるが、東南アジア大陸部にも分布している。極めて広域的なモチーフである。各地の「豆鹿説話」には『ジャータカ』のモチーフと類似した話がこのほかに10数例確認できる。なお、インドネシアへの『ジャータカ』の流入は8-9世紀に造られた中部ジャワの寺院レリーフに始る(注59参照)。

##### ②『パンチャタントラ』よりの借用例

『パンチャタントラ』(第1巻8話)<sup>(65)</sup>に源を発すると思われる「水鏡」のモチーフもまた広域性を持つ(マレー半島、スマトラ、ジャワ、チベットなど)。賢い兎が自分の命を狙う獅子に「あなたの敵が井戸のなかにいる」と水面に映る獅子自身を示して襲わせ、水中に追いやるというモチーフである。ブンクル(スマトラ島)の民話「豆鹿と虎」に類話がある。「虎に狙わ

(59) 『ジャータカ』の説話モチーフの発生は紀元前3世紀以降だとされる。文献としてはパーリ語版、サンスクリット語版などがあるが、成立年代は明確でない(干潟龍祥『ジャータカ概観』春秋社、1981年、7頁)。中には「兎本生」「鹿本生」などの動物寓話が多数ある。また中部ジャワのポロブドゥール、サジワン、ムンドゥット各寺院のレリーフにも『ジャータカ』のモチーフ「空飛ぶ亀」「猿の生肝」「牛と虎」などが刻まれていることから、遅くとも8-9世紀にはインドネシアに伝来していたことが確認できる。

(60) 前掲 Winstedt 1969, p.9 にはインドからの *loan stories* という説明がある。

(61) Soewito Santoso, The Islamization of Indonesia/Malay Literature in its Earlier Period, *Journal of the Oriental Society of Australia* vol.8, Dec.1971, p.9

(62) 中村元他監修『ジャータカ全集 1』春秋社、1984年、184-185頁の要約

(63) 前掲 Winstedt 1906, pp.67-68

(64) 前掲 ヤン 1984、674頁

(65) 田中於菟弥、植村勝彦訳『パンチャタントラ』大日本絵画、1980年、96頁

れている豆鹿は『先ほど森の王者のあなたさまと対決したいという者に会いました』と虎の闘争心を煽る。虎を現場へ案内する。川面に虎自身の姿が映っているのだが、愚かな虎は敵だと信じる。敵に飛びかかった虎は水中に落ちる」という話である<sup>(66)</sup>。「豆鹿説話」には『パンチャタントラ』と類似したモチーフがこのほかに8例程度確認できる。なおインドネシアへの『パンチャタントラ』の流入は東ジャワのジャゴ寺院（13世紀）のレリーフに見ることができる。

### ③インド民話からの借用例

ベンガル民話に「川岸で鰐に足を噛みつかれたジャッカルは、それは木の根だと偽る。鰐はあわててジャッカルの足を放し、近くの木の根を噛み直す」という話がある<sup>(67)</sup>。「豆鹿説話」では主人公は豆鹿に置き換えられるが、モチーフは酷似している。類話はマレー半島、インドネシアのジャワ・スマトラ・スラウェシ・ハルマヘラ・ロティ・ティモール・東スンバ、大陸部のカンボジア、遠くアマゾン先住民<sup>(68)</sup>にも分布している。この他にもインド民話からの借用は多数確認できる<sup>(69)</sup>。

### ④フィリピン、インドネシア周縁地域からの借用例

「豆鹿説話」のモチーフには、フィリピンやフィリピンに隣接するインドネシア北部や東部に分布する民話からの借用例もある。「騙した猿が騙された亀に復讐される」モチーフ（いわゆる「動物闘争譚」）である。まずフィリピン民話の要約を示す。「猿と亀はバナナの木を上下半分に分けて植える。猿の木は枯れるが亀の木は実る。猿は亀の収穫を手伝うが、実を食

べて皮を亀に投げつける。亀は先の尖った小枝を木の根元を囲むように並べる。狩人が来ると亀が叫ぶと、猿は慌てて飛び降り小枝に全身を刺され死ぬ」という話である<sup>(70)</sup>。インドネシア北部や東部にもまったく同じ話が分布している。では「豆鹿説話」ではどう借用されているのか。「猿と豆鹿」というシマルンゲン（スマトラのバタック族地域）で記録された民話がある。「豆鹿と猿がバナナの木を植える。豆鹿の木は成長するが、猿の木は枯れる。収穫時、猿は豆鹿の木に登って実を食べ、皮を豆鹿に与える。次の収穫時、猿が木に登ると、豆鹿は侮辱的なことばを投げつける。怒った猿はバナナを次々放り投げ、豆鹿はバナナを手に入れる」という話である<sup>(71)</sup>。このように「豆鹿説話」にはフィリピンやインドネシア周縁部に起源を持つモチーフが取り入れられている。

### ⑤イスラーム説話からの借用例

インドネシアへのイスラームの伝来が記録に現れるのは、13世紀である（「2」）。イスラーム化の影響は「豆鹿説話」においては「預言者ソロモン」の登場に具現され<sup>(72)</sup>、インド説話モチーフを借用した話にも、しばしばソロモンが登場する。では「豆鹿説話」においてソロモンはどのように描かれているのか、例を示そう。以下はマレー半島のペラックで採録された話で、ソロモンは動物たちに君臨する王として登場する。粗筋は「山羊を食べる夢を見た虎は勝手に夢の実現を山羊に迫る。仲介者の豆鹿は森の王者ソロモンの裁定を仰ぐ。裁判の席で豆鹿はソロモンの館が焼ける夢を見たので、館に

(66) Naim Emel Prahana, *Cerita Rakyat dari Bengkulu 2*, Grasindo, 1997, pp.37-40

(67) 西岡直樹訳「ジャッカルとワニ」『インドの昔話 下』春秋社、1983年、117頁 および Mary Frere, *Old Deccan Days or Hindoo Fairy Legends Current in Southern India*, John Murray, 1898, pp.211-212

(68) R.O.Winstedt, The Indian Origin of Malay Folk-Tales, *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society*, No.82, 1920

(69) 前掲 Winstedt 1969, p.6

(70) ディーン S. ファンスラー『フィリピンの民話』（サミュエル淑子訳）大日本絵画、1979年、245-247頁

(71) Benyamin Saragih & Henry Guntur Tarigan, *Cerita Rakyat Simalungun: Cerita Kancil*, 1980, pp.27-30

(72) 前掲 Winstedt 1969, p.8（「ソロモンは明らかにイスラームとともに伝来した侵入者である」）



火をつけると迫る。ソロモンは豆鹿の真意を理解し、虎に山羊を食べることを禁じる」という話である<sup>(73)</sup>。類話がインドネシアの民話にもあるが<sup>(74)</sup>、ソロモンの替りに「村長」や不特定の「王」が登場する。「村長」や「王」がイスラーム化後にソロモンに置き換えられたと推測される。なおソロモンは旧約聖書に登場する王であるが、イスラーム信仰においては「賢く正しい指導者で、鳥や動物の習性や言語を理解できる動物王国の統治者」<sup>(75)</sup>である。イスラーム色の添加された「豆鹿説話」では、豆鹿はソロモンのよき補佐役として登場する。

以上のように「豆鹿説話」は外来文化の影響を受けてそのモチーフを多様化させた。東南アジア全体を視野に入れると、「豆鹿系説話」にはモチーフの類似による広域性と主人公が賢く（ある時には小賢しい）悪戯な小動物であるというトリックスターの的な共通性が見られる。他方、モチーフの類似とは対照的に、主人公には在地性が投影されている。たとえばインドでは主にジャッカル、マレー・スマトラ・ジャワ・ボルネオでは豆鹿、ティモールでは鼠、セレベス・ハルマヘラ・西イリアン東部では猿、チャンパ・アンナン・カンボジア・ビルマ・雲南・チベットでは兎という具合である。アールネによれば<sup>(76)</sup>、昔話が移動する際、未知の事物がその地方で知られた事物に置き換えられる現象が見られるという。また伊藤<sup>(77)</sup>は主人公の設定に現地化の特徴が現れるとし、「帰化説話」という用語で説明している。「豆鹿系説話」においても「置換」や「帰化」の現象が見られる。主人公の設定は在地性の象徴である。豆鹿が生活圏にいたジャワ・ボルネオ・スマトラ・マレ

ーなどでは、主人公として豆鹿が選ばれたのである<sup>(78)</sup>。

### 3-2 モチーフ伝播の足跡（事例：「豆鹿と鱔」）

説話モチーフの類似を検討する際、問題となるのは、伝播による類似か偶然の類似かという点である。Winstedtによれば<sup>(79)</sup>、複数モチーフから構成されるまとまりのある話が類似している場合は伝播による可能性が高いという。この説に依拠し、ここでは「豆鹿説話」のうち複数モチーフから構成される「豆鹿と鱔」を取りあげ、伝播の足跡を辿る。まず Winstedt が採録した「豆鹿と鱔」<sup>(80)</sup>を基本形として示す。以下はその抄訳であり、話は①②③の3モチーフから成る。

①鱔は倒木の下敷きになり水牛に助けられるが、恩ある水牛を襲う。そこに来た豆鹿は水牛に事件の発端を訊ね、現場へ行って当初の状況を再現させる。かくて鱔は再び倒木の下敷きになり、水牛は救われる。②それ以来豆鹿に復讐心を持つ鱔は、ある日豆鹿の足に噛みつく。豆鹿は噛みついているのは枯れ枝だと鱔を騙す。愚かな鱔は豆鹿の足を放す。③豆鹿は対岸に実る果物が食べたい。川を渡る手段がないので、ソロモンの命を受けた使者だと偽り、鱔に頭数調査をするから並ぶように指示し、鱔の背に飛び移りながら対岸へ渡る。

複数のモチーフから構成される上述の話は類話が多く、マレー半島、西ボルネオ、スマトラ、ジャワ、南スラウェシ（ブギス族）など現在のマレーシア・インドネシア地域だけでなく、インドや東南アジア大陸部にも分布している<sup>(81)</sup>。ただし、モチーフの配列順が異なる、主人公

(73) G.M.Laidlaw, A Pelandok Tale, *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society*, No.46, 1906, pp.87-88

(74) Philip Frick McKean, The Mouse-deer (Kantjil) in Malayo-Indonesian Folklore: Alternative Analyses and the Significance of a Trickster Figure in South-East Asia, *Asian Folklore Studies*, 30 (1), 1971, pp.77-78 および 花岡泰隆『インドネシアの民話』牧野出版社、1974年、72-74頁

(75) 同上 McKean, p.73

(76) アンティ・アールネ『昔話の比較研究』（関敬語訳）岩崎美術社、1969年、45頁

(77) 伊藤清司『昔話・伝説の起源』第一書房、1991年、x頁

(78) 前掲 松林 2008、131頁

(79) 前掲 Winstedt 1969, p.7

(80) 前掲 Winstedt 1906, pp.62-64

(81) 前掲 ヤン 1984、前掲 Dixon 1964、前掲 Dipodjojo 1966、前掲 Winstedt 1969 など

が豆鹿以外の動物である、モチーフの加除が行われる、などの差異が散見される。だが複数の類似モチーフから構成されていることから、説話の類似は偶然ではなく伝播による可能性が高い。では起源地はどこか。Dixon や Winstedt が指摘するように<sup>(82)</sup>、やはりインドであろう。「2」で述べたように、文化交流史から見てもそう考えるのが自然である。そのうえ「豆鹿と鰐」に類似した話が単一あるいは複数モチーフ構成でインド民話にあるからである<sup>(83)</sup>。だがインド民話がそのまま受容・伝播されたわけではない。伝播の過程で現地化されるとともに、モチーフの加除によって話が多様化するからである。東南アジアでも大陸部と島嶼部ではモチーフは微妙に異なる。インドネシア域内でも東部と西部では差異がある<sup>(84)</sup>。以下では、各モチーフを精査し、伝播過程と現地化について仮説を示す。

まず、インドモチーフと東南アジアモチーフとの際立った差異はモチーフ③にある。インド民話には「ジャッカルが1頭の鰐の背に乗って川を渡る」モチーフはあるが<sup>(85)</sup>、「複数の鰐を並べて川を渡る」モチーフは管見の限りではない。一方東南アジア大陸部には単複両方の鰐が、島嶼部ではもっぱら複数の鰐が登場し、鰐を並べる場面が話のハイライトとして絵画化されている。単数から複数への変化は伝播過程で生じたと推測される。その分岐点は大陸部である。アンナンには単複両方の話が伝承されているからである<sup>(86)</sup>。ちなみにこのモチーフは『古事記』にもあり、遅くとも8世紀には日本まで伝播している。大陸部で複数の鰐に変化したモチーフは島嶼部へ伝播し、拡散したと推測できる。

次にモチーフ①は「インドではよく知られた話」<sup>(87)</sup>で、『パンチャタトラ』にも同じモチーフがあるだけに、広域的に分布している（東南アジア大陸部、島嶼部、チベットなど）。起源地であるインドのベンガル地方には「鰐が助けられた男を襲うが、事態の是非を第三者に問ううちに、ジャッカルの機転で命拾いする」という「是非を問う」モチーフが挿入された民話がある<sup>(88)</sup>。ただし「是非を問う」場面が前述の「豆鹿と鰐」にはない。一方南スラウェシのブギス族の民話には「是非を問う」モチーフを含む複数モチーフから成る「豆鹿説話」がある。伝承過程でのモチーフの加除は複雑な問題だけに、説明は容易ではない。

モチーフ②は「3-1」で述べたとおり、インド起源である。インドネシアには次のような変種がある。「鰐は豆鹿を襲うために丸太のふりをする。賢い豆鹿は、丸太なら腹を上にして寝返りをうつが、鰐なら動かないと言う。鰐は寝返りをうつ。それを確認した豆鹿はやっぱり鰐だとからかう」<sup>(89)</sup>。「豆鹿の足か小枝か」が「鰐か丸太か」へと転換させた発想が愉快である。あるモチーフが別のモチーフの創生を喚起したのであろうか。

紙面の都合で触れる余裕はないが、「1」で述べた「豆鹿と虎」も複数のモチーフから成る話で、東南アジア大陸部から島嶼部まで広く分布している。しかし、管見の限りではインドに類似話が見られないことから、東南アジアで創出された可能性が高い。「豆鹿説話」はすべてがインド起源とは限らず、大陸部から島嶼部へ伝播したモチーフ、島嶼部域内で発生・発展したモチーフなどが混在するハイブリッド構造となっ

(82) 前掲 Dixon 1964 および前掲 Winstedt 1969

(83) 前掲 Dixon 1964, p.333, 前掲 Dipodjojo 1966, p.74, 前掲 西岡直樹 1998, 189-193 頁, 西岡秀雄「兎と鰐説話の伝播」『日本の古典と口承文芸』有精堂出版、1983年、84頁

(84) 前掲 Dixon 1964, pp.203-205

(85) 西岡秀雄『文化地理学』廣文社、1986年、82頁

(86) 前掲 西岡秀雄 1983, 79頁および前掲 Dipodjojo 1966, pp.71-72

(87) R.O.Winstedt, The Folk-tale Indonesia and Indo-China, *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society*, No.76, 1917, p.123

(88) 前掲 西岡直樹 1998, 189-190頁

(89) 前掲 ヤン 1984, 145頁(スマトラ島ランボンの民話)

ている。

## おわりに

「豆鹿説話」の起源・伝播過程についての先行研究はいくつかあるが、未だ全体像が解明されているわけではなく<sup>(90)</sup>、すべてを解明することは今となっては容易ではない。本稿で筆者が仮説として述べたことも「豆鹿説話」伝播経路のごく部分的な解明にすぎない。モチーフやエピソードによって、起源や伝承経路が異なるという可能性もある。またインド起源、大陸部起源、島嶼部起源のモチーフが複雑に絡み合っ「豆鹿説話」が成立したとも考えられる。いずれにしても「豆鹿説話」に多文化性が息づいているということは事実として確認できる。その背景には、古くからの東南アジア域内交流、インド文化・イスラーム文化の移入など人々の接触・交流があったことは「2」で述べたとおりである。

最後に、現代インドネシアにおける「豆鹿説話」の役割と意味について3つの側面から指摘しておきたい。多民族・多文化国家のインドネシアにおいて、「豆鹿説話」は国民的な説話として尊重され、愛されているからである。

### ①国民文化として

「豆鹿説話」および「豆鹿系説話」のモチーフはインドネシア各地に広く分布しているために、多民族・多文化から成るインドネシアの国家スローガンである「多様性の中の統一」を象徴する格好な材料として取りあげられてきた。実際、政府は「国民文化」を発掘するために独立後、「豆鹿説話」をはじめとする口承民話の発掘・記録・研究・出版に精力を注いできた<sup>(91)</sup>。今も主人公の豆鹿はインドネシア人なら誰でも知っているキャラクターとして愛され、絵本や児童文学の素材に用いられている。「豆鹿説話」

は国民国家の統一を強固にするための国民文化のひとつなのである。

### ②生きるための知恵・戦略の源として

インドネシア人にとって「豆鹿説話」は難事を切り抜けるための知恵や戦略を与えてくれる源泉である。話の中に力のない弱者が強者に勝つためのヒントが隠されており、戦略的でなければ森で生きてゆけない小動物の豆鹿に自己を仮託できるからである。危機への対処法としての教訓が話の中に満ちているからこそ、大人をも引きつけるのである。豆鹿の存在は「世界を混乱させる者に対する神話的武器」<sup>(92)</sup>と定義する研究者もいる。インドネシア人の思考様式にぴったりした説話なのである。だからこそ今日まで生き残ったとも言えよう。

### ③幼児・児童教育の教材として

オランダ植民地時代に児童文学化された「豆鹿説話」は現在も教訓話として子どもの教育のために利用されている。豆鹿を主人公とした絵本や児童文学本は今も出版され続けている。利口だがいたずらで、小柄だが大きな輝く瞳を持つ豆鹿は、子どもにとって自分の分身であり、魅力的なキャラクターなのである。筆者があるインドネシア人から直接聞いた話だが、子どものしつけのために豆鹿を主人公にして自分で創作した話を時に応じて我が子に聞かせるそうである。親にとっては幼児教育の素材でもある。たとえば、子ども用民話本の「豆鹿と虎」の話（「3」の②で取りあげたブンクルの民話）には次のような解説がついている。「虎は豆鹿に騙されました。水面に映る虎自身の姿を敵だと欺かれたのです。悔やんでもどうにもなりません。この話から学ぶべきことは、相手がなにもできない弱者だと思って勝手放題にはいけないということです。弱者はそれなりの方法で立ち向かいます。なにもできないように見える人を無視してはいけません」と。また、15世紀に

(90) 前掲 Dipodjojo 1966 (pp.73-74) では、伝播過程について3つの仮説（大陸部起源、ジャワ起源、インド起源が伝播過程で変容）が示されているが、いずれも決定的ではないと述べられている。

(91) 百瀬侑子「インドネシアにおける国民文化形成と民話」『アジア太平洋レビュー』3号、2006年

(92) Justus van der Kroef, *Animal Folklore of Indonesia, United Asia*, 11 (3), 1959, p.252

東ジャワで影絵芝居（ワヤン）化された「豆鹿説話」は「ワヤン・カンチル」として現在まで子どもの教育教材として活用されている<sup>(93)</sup>。

なお、古代よりインドネシアをはじめとする東南アジアと交流のある中国の文化が「豆鹿説話」にどのような影響を及ぼしたかという問題が残されているが、本稿では触れる余裕がなかった。今後の課題としたい。

---

(93) ワヤン・カンチル (*wayang kancil*) と呼ばれる豆鹿カンチルを主人公とする影絵芝居は子ども向けに今でも上演されている。  
[www.okezzone.com](http://www.okezzone.com)、2010年5月8日アクセス